みなとMOTOMACHIケンチクさんぽ vol.24
公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会　地域まちづくり委員会

## モトコーを歩く2

前回の「モトコーを歩く」から1年と少しが経ち、あの時以来歩いてなかったモトコーを歩いてみた。1年前に歩いたときには、コロナ禍ということもあって、街もモトコーも寂しさを感じた。その後、退去が進み、もう見納めかと思って歩いた記憶がある。今回は、コロナ禍も明け、街にも人が戻りつつある中、モトコーもまばらではあるが、人の気配を感じることができた。見納めかと思っていたモトコーの原風景は少しだが所々に残っており、今回新しいモトコーとして作り変えられた場所には、お店が入り始めている。新しいモトコーの外壁が真っ黒で、前回から人を寄せ付けない雰囲気を持つことへの違和感は前回歩いた時も今回歩いた時も変わらなかった。そして、この黒い壁が長い距離で連続して、神戸の街を横断していくのかと思うと、これでいいのかな、、と神戸の魅力がまた失われた気がしてしまった。

新しいモトコーの中には、前のモトコーで使われていたファサードをそのまま復元させている店舗があって、新しくなることを肯定的に捉えた態度に嬉しい気持ちになった。

神戸駅に近いエリアには、無料の駐輪場が整備されていた。行き場のない自転車が溢れる風景をよく見かけるので、これから先の計画でも増えるといいと思った。ただ、内部は薄暗く、女性が使うには少し怖い雰囲気もあったので、できれば、外壁は取っ払いスケスケであってほしいとも思った。

所々、歩道との間に、鎖やフェンスで囲まれたアスファルト舗装の空間がある。これは、1年前から変わっていない。植栽を行うわけでもなく、ベンチでも置けそうだが、フェンスと鎖でわざと距離を作って、何になるのだろうかと期待だ。

新しいモトコーを歩いていると、地図上では、知っているはずの場所なのにふと知らない場所に来ている感覚になり、頭の中にある連続したイメージが所々欠落したかのような不安に陥る。そんなときモトコーから出て外の景色を見ると、今の位置が確認できる。私の中のデータが更新されていく感じに気づく。私はこの感覚を以前にも持ったことがある。それは、阪神淡路大震災の火事によって焼失したエリアを歩いた時の感覚だった。高校生のころ毎日通っていた通学路が再開発され、ほぼ全て新しくなったあと、久しぶりに歩いた時だった。実家から歩いて、しばらくすると地図上ではよく知っているはずなのに途中から記憶の中にない町が現れ、少し混乱する。しばらく「今どこを歩いているのだろうか」とスマートフォンで確認したり、通りの向こうに見える見覚えのある景色を頼りに、歩き進める感覚を思い出した。

取り壊しになるあるエリアでは連続するシャッターにアートが連続し、楽しみながら歩くことができた。あと少しで見られなくなるこの風景を飾り、最後に惜しむ気持ちをイベント化するのもありなのではないかと思った。

原風景のモトコーの通路

新しいモトコーの通路

原風景のモトコーの外観

新しいモトコーの外観

そして、新しい黒い外壁はもしかすると、モトコーの利用者が手を加えることのできる余白として捉えることもできるのではないかと考え直してみると、原風景を作り出していたモトコーの特性を少し受け継ぐことができるのではないかと思った。また、原風景が取り壊され、新しくなるまでの長い間、設置されている仮囲いやフェンスは、できれば、これからの期待を醸し出すような心遣いがあっても良さそうだ。

これからも新しくなるモトコーの使い方や、もっと良くしていくためにも、一方的な開発ではなく、意見を出し合いながら、今まで以上の魅力を持った通りにしていってほしい。

阿曽 芙実 (あそ　ふみ)
阿曽芙実建築設計事務所 代表
一級建築士
武庫川女子大学　非常勤講師
摂南大学　非常勤講師